慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一六年度ベイティン遺跡(パレスチナ自治区)における考古学的発掘調査
Sub Title	The 2016 archaeological excavations at Beitin, Palestine : preliminary report
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, David Tomotoshi) 菊池, 実(Kikuchi, Minoru) 稲野, 裕介(Inano, Yusuke) 間舎, 裕生(Kansha, Hiroo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2017
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.1/2 (2017. 7) ,p.165(165)- 196(196)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20170700-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一六年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査

杉本智俊・菊池　実
稲野裕介・間舎裕生

Ⅰ．序　論

慶應義塾大学西アジア考古学調査団は、二〇一六年八月二日から二六日までパレスチナ自治区ベイティン遺跡に調査隊を派遣し、発掘調査を行った。本調査は、同自治政府観光遺跡庁（長官　ジハド・ヤシン氏）との共同調査であり、日本学術振興会科学研究費（基盤研究A、課題番号24251015）によるものである。

ベイティン遺跡は、さまざまな遺跡群からなる複合遺跡であるが、本年度は、昨年度までの調査で大規模なビザンツ期の教会堂の存在があきらかになったブルジュ・ベイティン遺跡を調査対象とし、その構造をより正確に把握することを目的とした。[1] 調査は、すでに設定されているB2地区およびD地区を拡大して行った。B2地区は教会堂の南壁と接する部分であるが、これを北に拡大し、中央の石敷きの床と教会堂の屋根を支える列柱の位置を確認することを目的とした。D地区は、塔（A地区）の北側、教会堂のアプス部分であり、昨年度十分確認できなかったアプスの北側及び東側部分の調査を行った。

本報告では、すでに教会堂西側入口部分で発見されている中央の部屋を部屋1、その南側の部屋を部屋2、その北側の部屋を部屋3とし、本年度調査したアプスから突き出した祭壇の北側で検出した部屋（家畜小屋）を部屋4、アプスの真北にある小部屋を部屋5、そのさらに東側に位置する部屋を部屋6として報告する。

それぞれの地区のスーパーヴァイザーは、以下の通りである。B2地区：菊池実、イヤド・マズルーム Iyad Mazloom（スーパーヴァイザー）、長尾琢磨（アシスタント・スーパーヴァイザー）、D地区（部屋4及び西側、南側トレンチ）、稲野裕介、スフィヤン・イダイス Sufyan Idais（スーパーヴァイザー）、大内絢（アシスタント・スーパーヴァイザー）、D地区（部屋5、6及び東側トレンチ）：間舎裕生、バッサーム・ナサスラ Bassam Nasasra（スーパーヴァイザー）、藤澤綾乃（アシスタント・スーパーヴァイザー）。また、有吉亮がレジストラー、佐野真奈美、神田惟が内業班を担当した。この他、日本側から、松本健佑、藤田隆太郎、三上遥、國井優花（慶應義塾大学学生）、松村由美（関西大学大学院生）、林和行（米国ベイラー大学大学院生）、濱谷望（ヘブル大学OB）、パレスチナ側から、バラ・アイヤド Bara Ayyad、アリージュ・アボ・シャルク Areej Abo Sharkh（アル・クドゥス大学学生）が調査に参加し、現地から毎日11名の労働者を雇用した。

本報告は、各地区スーパーヴァイザーによる報告に杉本が加筆修正したものである。

Ⅱ．B2地区

二〇一五年度の本地区の調査では、ビザンツ教会の南側外壁の位置がほぼあきらかとなり、それと並行して東西方向に走る表面が平らな一列一段の低い石列を検出した。[2] これは列柱の基礎部である可能性が高く、その南側にはモザイク床、北側には石敷きの床が確認された。アプスの存在からこの教会堂は大きなバシリカである可能性が考えられたが、もしこの石列が側廊を区切るものだとすると、全体構造のかなり南側に寄っていることになる。[3] 屋根を支えるためには、この内側にもう一組の列柱を配する五廊式の構造を推定するか、あるいはまったく異なる構造を考える必要があった（図1参照）。この点を明らかにし、教会堂の全体像を解明することが、本調査区の当初の目的であった。

そこで、今年度は既掘地区の北側に隣接し、アプス正面に位置するグリッドH9に焦点を当てて教会構造の把握を目指した。しかし、調査が進むと、H9及びその周辺から独立した特殊な遺構が出現したので、この場所では列柱の位置を確認することはできないことが予想された。そのため、新たに教会堂の入口近くのグリッドH7

図１　2015年度調査終了時に推定されたビザンツ教会の構造

の調査も行い、この点を確認することとし、Ｈ９地区では出土した特殊な遺構の性格解明をめざすこととした。

１．Ｈ８／10、Ｇ９／10

（１）調査地区

当地区は、八月四日に調査を開始し、二二日に現地調査を終えている。発掘はビザンツ教会のアプスのほぼ正面に位置するＨ９グリッドから開始したが、調査開始当日からすでに石列に囲まれた大きな「ピット」が現れ、すぐにそれが独立した相当規模の遺構であることが明らかになった。そこで教会堂の構造把握をここで行うことは断念し、この遺構の性格解明を目的とすることにした。調査区は遺構に沿って拡大し、最終的にＨ９全体の他、Ｈ８、Ｈ10、Ｇ９、Ｇ10の一部を含むようになった。それでも、遺構の東側部分と北側部分の一部は、未発掘で終了している。

（２）基本層序

この遺構は、まず四基のＬ字状の「囲み」がほぼ正方形をなすように検出され、その中央に丸く大きな空間が開いていた。[4] それぞれの「囲み」の中には、丁寧

図２　アプスの正面で発掘された遺構（南西側から撮影）

に整形された柱台が据えられており、「囲み」の外側二辺の石の中央やや外側寄りに溝が彫られていた。また、この空間の東側では、それと接して造られた矩形の建築があきらかとなった（図２）。

実際の発掘時には、まず正方形の構造の中央に存在する円形の空間部分（ローカス［以下括弧内はＬとする］449、上層Ｌ445）を掘り下げたが、表土より下の堆積に土層の区別はできず、床面（深さ約70㎝）に至るまでビザンツ期からマムルーク朝期の土器を含むものであった。この床面はビザンツ期の教会堂の床に漆喰を塗ったものであり、おそらく遺構はビザンツ期から使用されていたと思われるが、廃絶年代はマムルーク朝期とせざるを得ない。逆に、十字軍期、ビザンツ期の使用時の堆積に関しては、すでに失われてしまったと考えるべきであろう。この空間の東側に接続する矩形の遺構も、床面に至るまで同一の土層であり、ビザンツ期からマムルーク朝期までの土器片を含むものだった。

その後、四隅の遺構の内部を発掘した。それらには瓦礫が詰められており、検出された土器はほぼすべてがビザンツ期のものであった。[5] ここから出土する遺物は、この遺構の建て替え時の年代を考える上で参考になるであ

図３　南西角の囲み（ローカス483、東側から撮影）

ろう。

（３）出土遺構

Ｌ字型の囲み（ローカス480、481、483）

上記三基の囲みは図３のとおり、外側が直交する石列で構成されており、内側の石列にはそれぞれ円の四分の一になるようにアールがつけられていた。高さは石段二段60㎝であったが、一段しか残っていなかった部分も存在する。構成する石は、非常に精緻に切られており、教会堂の石敷に直接据えられていた。外側の石の上面には、長辺に並行するように溝が彫られていた。

囲みの外周の石の内側には柱台が据えられており、二辺の直交する直角部分に精巧に嵌められていた。最も残存状態のよい南西角のもの（Ｌ483）は、各辺三つの切り石が組み合わされて構成されており、外周二辺が直交する部分では、九十度曲がった石が南辺側に用いられていた。その角の中央と西辺の南から二番目の石の北端には正方形の溝が彫られており、その間を幅12㎝の溝がつないでいた。同様の細長い溝は南辺にも存在したが、端の正方形の溝は認められなかった。これらは、教会堂でしばしば用いられるチャンセル・スクリーン chancel screen/reredos とポスト post のためのものだと思われ

る。[6]

北東角のもの（L481）にも、各辺二本以上の上段の外周石が組み合わされていたが、おそらく配置は乱されていた。北辺では、東側の石の内外が反転されており、クランク状になっていた。東辺では、ほぼ正方形（22㎝×23㎝）の彫り込みとその延長である幅12㎝、深さ6㎝の溝のある石が確認された。石の長さは、約67㎝であった。この石は元来北端に置かれるはずのものだと思われるが、南端に来ていた。また、その北側では上段の石がなくなって、下段の石に溝の施された石が用いられていた。溝の幅は10㎝、深さ6㎝で、石の長さは完全の露出されていないが、26・5㎝以上、高さは37㎝であった。

南東角の囲み（L480）では、東辺、南辺の直交する部分で切り石がはずされ、粗く整形された石が充填されていた。内側の石は切り石であり、これらはおそらく後述する矩形の建物を接続する時に改変されたものと思われる。北西角のもの（L480）の上段外周の石は、一つしか露出されていないが、切り石で溝が彫られていた。ただし、本来隅に期待される正方形の溝は確認されなかった。

囲みの内側のアール部分も、基本的に切り石を組み合わせて造られていた。おそらくこれらの石組みで囲まれた中央の空間には、すべて創建時から土が入れられていたと思われる。内側の石組みの内面は粗く削られていて露出していたようには見えず、もし土がなかったとすると角に置かれた柱台（後述参照）が動いてしまうからである。一方、内壁の石組みの外壁は、それぞれ漆喰で少なくとも四重に塗られており、かなり古い時代から四つの囲みで構成される構造を維持していたものと考えられる。部分的な改変はなされているが、元来四つ合わさって構成される構造が存在していたことはたしかであろう。尚、北西の囲みの内側の漆喰には、火の使用を示すような炭で黒くなった箇所が部分的に残っていた。

柱　台

四隅の囲みのうち三つからほぼ同型、同サイズの柱台が出土した。もう一基は露出されていないが、そこにも同様の柱台が据えられていたと推定される。柱台の四角い底部はみな、囲みの内部で外側の石列の角に接していた。これらは、いずれも精緻に整形されており、台座plinth部分の上にアッティッカ式柱台Attic baseを持っていた（図4）。ローカス483のものに関しては、台座の高さが34㎝、柱台全体の高さは59㎝である。床面に接する台座は67㎝×67㎝の方形である。床面から15㎝の部分

に8㎝幅で、深さ1・5㎝の掘り込みがなされていた。この掘り込みの上下1㎝部分には細く水平に切り込み（マージン）が施されていた。アッティッカ式柱台には、トルス torus およびアニュレット anullet が各二箇所造作され、スコティア scotia は一か所である。トルス2に据えられる円柱の直径は50㎝である。ローカス480では、

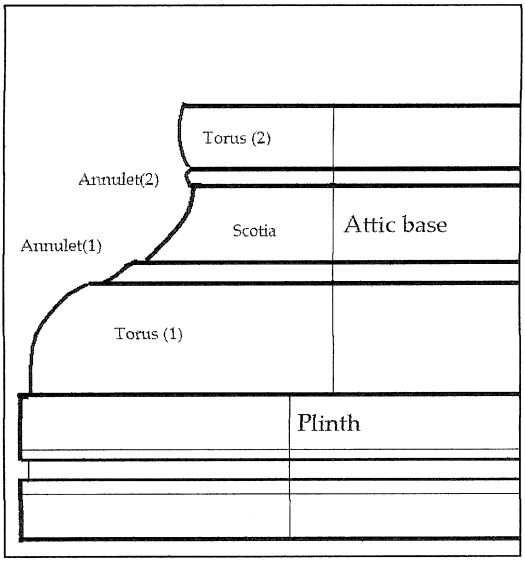

図4　柱台の概念図（菊池実作成）

台座の一辺は67㎝、柱台全体の高さは52㎝、柱の直径は48㎝であった。ローカス481では、台座の一辺は65㎝×67㎝、柱台全体の高さは60㎝、柱の直径は51㎝であった。

柱台は、すでに教会堂内部の堆積から、別に三基確認されている。地下水槽の蓋にされているもの（底部の一辺46㎝）、側廊部分の後代の壁に二次使用されているもの（底部の一辺64㎝、高さ43㎝）、本遺構改変時の建材として再利用されているもの（底部の幅56㎝）である。いずれも台座とアッティカ式柱台を使用しているが、より簡素な作りであり、別の場所に使用されたものだと思われる。

本遺構の柱台は、すべて丁寧に切られて教会堂床面に密着しており、後代における二次使用と見るのは不自然であろう。実際、このように精巧な切り石建築は、本遺跡における十字軍期やマムルーク朝期の建築にはまったく知られていない。囲みの中の瓦礫の遺物がほぼビザンツ期の土器片であったことを考慮しても、柱台と少なくとも外周の石組は原位置にあったと見るべきであろう。円柱は天蓋（キャノピー）のようなものを支えていたと考えられ、教会堂中央部において特別な場所を記念する構造物であった可能性が高い。

図５　４つの囲みで構成された遺構（南側から撮影）

囲みの間の空間

囲みの間の空間は、元来は通路状（幅約150㎝）になっていたと思われるが、後から北側（L476）と西側（L479）のものは細長い切り石で埋められ、その内壁に漆喰が塗られるようになった（図５）。これら埋められた空間部分の漆喰は１～２層しか認められず、囲み自体の漆喰と比べてあきらかに薄かった。この空間部分は発掘していないので、その下の遺物の年代は不明である。一方、東側の通路（L454、表土：L541）は埋められておらず、後述する矩形の建物とつながるよう通路となっていた。

特筆すべき点は、南側の通路が後に半円形の壁（L448）で塞がれて壁龕状の小部屋（L467、上層L447、463）となっていた点である。壁龕に用いられた石は、この遺構の他の部分よりも大きく、上面を平らにしたものだった。その背後（南側）には、標高878・70ｍ前後で床面が存在し、平石敷き（L452）となっていた。この壁龕は、キブラにほぼ符合する南側に位置しており、丁寧に漆喰が塗られていること、元来記念聖堂の場所に位置していたことから考えて、おそらくミフラーブとして作り直されたものと思われる。これがこの遺構の最終形態であり、中央空間の堆積から出土した土器から廃絶年代はマムル

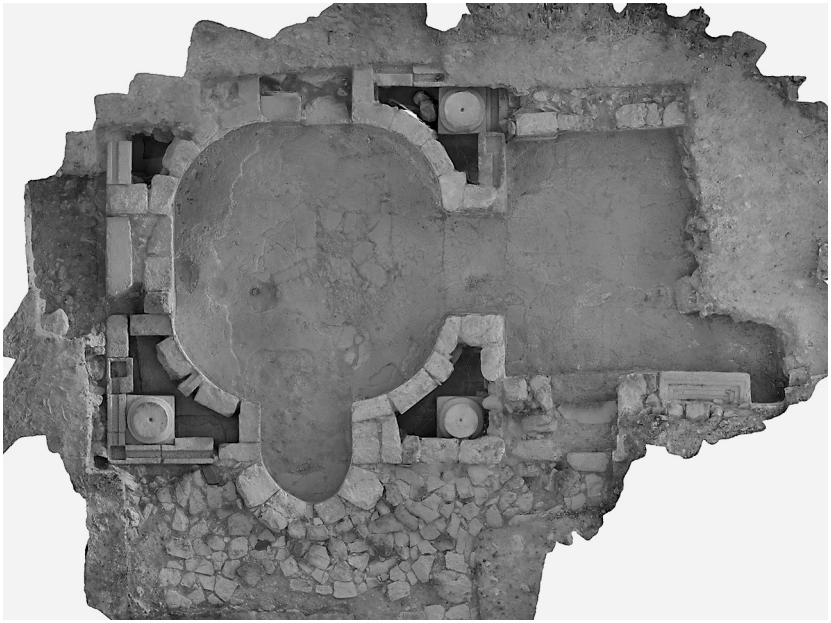

図６　４つの囲みで構成された遺構と東側の建物

ーク朝期だと考えられるため、同時代にはイスラームの礼拝施設（モスク）として使用されていたのであろう。

床

囲みで構成された遺構の床（L 449）は、壁と同様、全面が３～４層の漆喰で塗られ、厚い箇所では６cm以上となっていた。一部漆喰の下から石敷きの床面が露出していたが、そのレベルは他の箇所で知られる石敷きと同じであり、基段podiumなどがあった痕跡は認められなかった。四隅の柱台もこの床面に直接に据えられていた。

東側に隣接する矩形の建物

囲みで構成された遺構の東側では、それと通路で接続される矩形の建物を検出した（図６）。この建物の北端と東端部分は、調査期間の関係で確認することができなかったが、アプスの前面（D地区）にこの建物の延長は確認されていないので、そこまでは広がっていなかったこととなる。つまり、この遺構はマムルーク朝期の大型建物からは独立した建築だったと思われる。

この建物の横壁と床も、囲みで構成された遺構

と同様、全面に漆喰が塗られていた。囲み遺構では4～5層の漆喰が確認されているのに対し、この遺構では漆喰は3層の塗りしか確認できていない。おそらく囲みで構成された遺構が最初に存在し、それより後になってこの遺構が接続されたものと思われる。ただし、その後の塗りは両遺構で連続しているため、いったん接続された後、これらの遺構はひとつながりの建物として使用されていたであろう。(7)

この建物の南壁（L473＋475）には、三段の階段になった入口（L474、幅約1m、床の高さ878・20m、階段の最上部878・85m）が設けられており、遺構の床面よりも約65cm高い石敷きの床面から降りるようになっていた。また、南壁の一部には、ビザンツ期の大きな石材（長さ95cm、幅40cm超、高さ61cm）が再利用されていた。これらの事象も、この矩形の建物が、ビザンツ期には存在していなかったことを示しているであろう。

この建物内に堆積した土層（L471、上層L469）からは、ビザンツ期からマムルーク朝期の遺物が含まれていた。この遺構の廃絶年代はマムルーク朝期だと思われるが、その建設年代は不確かである。(8)すでに十字軍期に、記念聖堂に付属する小礼拝堂として、この建物が存在していた可能性も考えられるからである。実際、この建物は、全体に少なくとも三回漆喰が塗り直され、かなりの期間使用されていたと思われる。その場合、十字軍期の教会堂は、ビザンツ期の教会堂の破壊された周壁によって囲まれた中庭の中に独立して立っていたこととなる。

（4）考察―時代毎の遺構の性格

上述の調査結果から時代毎の遺構の形状を検討すると、以下のことが考えられる。

ビザンツ期

まず、四基の「囲み」によって形成された遺構は、おそらくビザンツ期に建設されたと思われる。これらはビザンツ教会の床直上に設置されており、位置的にも、入口からアプスに至る中心軸に載っているからである（図7a）。切り石や柱台も精巧に造られており、本遺跡において、このような石材を使用するのは、ビザンツ期以外に考えられない。囲みの外周の石には溝が彫られており、チャンセル・スクリーンという祭壇部分を仕切る石板がはめ込まれていたと思われる。四隅の円柱はおそらく天蓋のようなものを支えていたと考えられ、教会堂の中央部分になんらかの意味で記念的な施設が設置されていたと考えられるであろう。

図 7a　教会堂内における「記念聖堂」の位置

この施設の性格は、まだ十分に理解できていない。ビザンツ期の教会堂で、長堂（バシリカ）式教会堂に集中式の教会堂が組み合わされる例は、聖墳墓教会や聖誕教会をはじめ、多数知られているが、集中式の教会堂がバシリカの中央に位置する例はあまりないからである。[9] 北シリアでは、ベーマーと呼ばれる集中式の基壇が教会堂の中央に置かれる例も知られている（Loosely, 2012 参照）が、本遺跡のものは床に直接接していて基壇になっていない。洗礼槽の上などに設置されるシボリウムの可能性もあるが、本例は大きすぎるであろう。むしろ、本年度の調査であきらかになったように、列柱が周壁の内側四方を囲んでいたとするなら（後述参照）、周壁はあくまで屋外広場の囲みであり、この遺構そのものが周壁の中央に位置した集中式の教会堂である可能性も考えられる。そうすると、周壁と列柱の間はバシリカの側廊ではなく、周壁に沿った列柱廊 peristyle となり、その幅の狭さは問題とならない。また、周壁の内部全体に大型の石敷きが施されている点も、屋外空間のほうが合っている。一方、その場合、

囲み遺構は教会堂の外壁を支えられるような構造になっていないため、現在露出されている遺構の外側にもう一重外壁が必要となる。また、東側の周壁に位置するアプスとの関係も不明となる。

こうした点はさらなる調査が必要であるが、このように特殊な遺構が存在する自体、本教会堂がアブラハムやヤコブなどと関連した聖書の事蹟を記念したものである可能性を高めるものであろう[10]。

十字軍期

十字軍期にこの遺構がどのような状態であったかを知ることは難しい[11]が、後のマムルーク朝期にも使用されたことを考えると、それが見える形で残っていたはずである。しかし、十字軍期の遺構と考えられる塔の入り口や水利施設の標高から考えられる地表面はビザンツ期より30㎝ほど高くなっているので、石敷きの床は土に覆われて中庭のようになり、囲みの遺構も中途まで埋まっていたと思われる。実際、チャンセル・スクリーンはすでに使用されておらず、柱もおそらく使用されていなかった。一度破壊された遺跡で、自立した柱がそのまま残っていた可能性は低いからである[12]。

囲みの東側の建物がいつ建設されたのかも、判断が難しい。ただ、この建物の一部にビザンツ期の建材が再利用されていたこと、この遺構の床に降りるために後代の床面から階段が設置されていたことを考えると、あきらかにビザンツ期の建築ではないと考えられる。ビザンツ期には、四基の囲みだけが存在していたとすべきであろう。一方、十字軍期に、すでにビザンツ期の大型教会堂を失っていた人々が、記念聖堂に隣接して小型の礼拝堂を建てた可能性は十分考えられる。囲みの間の通路の壁はマムルーク朝期に埋められたと思われるが、その上に塗られた漆喰は東側建物のものと比べて薄く、両方が同時期に造られたとは考えにくいからである。また、この建物に降りる階段も造作が一様でなく、建て替え作業があったように思われる。

つまり、十字軍期には四つの囲みでできた遺構と東側建物が、周壁で囲まれた中庭に独立した遺構として立っていたことになる。四つの囲みからなる遺構の性格はまだよくわからないが、もしそれが教会堂内の施設で囲みの間の通路がまだ埋められていなかったとすると、開いた空間である「記念聖堂」と閉じた空間である東側建物が接合されていたことになってしまう。その場合は、おそらく四つの囲み構造を基礎部として、その上に木造の

上部構造があったと推定すべきであろう。

マムルーク朝期

マムルーク朝期の遺構の状態は、最終的に発掘された形であり、囲み構造の遺構と東側の矩形の建物がついた形である。囲み遺構の南側の通路は、半円形に閉じられてミフラーブとなっており、西側、北側の通路も閉じられて漆喰が塗られていた。これらの遺構の南側には、小ぶりな平石の敷石が施されているが、これはミフラーブによって壊されていないので、マムルーク朝期に敷かれたものだと考えられる。[13] ミフラーブの存在、丁寧に全面が漆喰によって塗られた仕様、宗教施設の連続性から考えて、この遺構はモスクとして機能したと考えられるであろう。[14]

囲みの間の通路になった空間は、南側の通路に半円形のミフラーブが造られていたことを考えると、マムルーク朝期に埋められた可能性が高い。十字軍期にすでに通路が埋められていたとすると、その埋土を外してミフラーブを造ったとは考えにくいからである。[15] ただ、この時期に通路の空間が埋められたとしても、木造の上部構造はなお必要だったと思われる。すでに独立した建物となっていた遺構には、屋根が必要であり、屋外空間と屋内空間を接続することは考えにくいからである。

東側の建物は、この時代にも半地下となっており、階段から降りるようになっていた。もしこの建物の元来の建設が十字軍期だとするなら、マムルーク朝期に、階段部分などに多少の改変が加えられたと思われる。その判断には、各時代の床面の高さと遺構の構造の関連など、より詳細な検討が必要となるであろう。

小　括

現状で考えると、ビザンツ期には、全体の周壁の中央に集中式の教会堂が存在したか（図7b）、長堂式の教会堂の中央に「記念聖堂」が存在した（図1参照）と考えられる。十字軍期になると、それは土で覆われた中庭に独立して立つ小教会堂となり、マムルーク朝期になると、その全体がモスクに変えられたようである。宗教が変わっても、アブラハムやヤコブを崇敬する共通の伝統を持っていたからである。このような現象を見る時、この場所には、長く族長たちを記念する伝承が存在し、礼拝方法の変化を経験しながらも、それが維持されたと考えるべきであろう。[16]

図 7b　集中式教会堂だとした場合の推定復元案

2．H7

（1）調査地区

H7では、南側に1mのボルクを設けつつ、5m×5mの調査区を設置して、発掘調査を行った。八月一〇日に発掘を始め、一六日に撮影と実測作業を終えている。このグリッドはビザンツ教会の入口から内部に入ってすぐ、中心軸からやや南側に位置している。H7（図8）は、推測された内側の柱廊の位置と教会全体の平面構造を明らかにする目的で選定された。結果的には、期待した東西方向の柱廊の石列ではなく、南北に伸長する石列が調査区西側で出土した。その東側はほぼ全面が石敷きの床面であったが、西側には石敷きは認められず、埋土となっていた。

（2）基本層序

表　土：厚さ5～20㎝。近代のものを含む多数の遺物。

表土下：厚さ40～50㎝。比較的柔らかな赤土。ビザンツ期からマムルーク朝期の土器片。

ビザンツ期の床面：大型の石敷きと低い石列。

図８　グリッドＨ７出土の遺構（西側から撮影）

（３）出土遺構

床上の土層

表土（Ｌ456）は、十分風化していない有機質を含む粗い土と小中規模の石が混在した柔らかな土で、近代のものを含む多数の遺物を含んでいた。土壌が茶褐色に変わった時点で、表土下（Ｌ457）として発掘した（表土下開始時のレベルは、海抜878・71ｍ前後）。堆積は比較的柔らかな赤土で、ビザンツ教会の床面は表土を含めて60㎝ほど下（878・10ｍ前後）から現れた。土層は、最下部でもビザンツ期からマムルーク朝期の土器片を含んでおり、全体がマムルーク朝期以降のものだと考えられる。また、薬莢やバッジなど近代の遺物も含まれていたので、かなりの攪乱があったと思われる。その他、注目すべき遺物としては、ローマ時代のものと思われるブロンズ製硬貨、ロバ用のハミが挙げられる。

ビザンツ期の床面（ローカス462）

調査区の西側部分以外は、全体が大きな板石の床面となっていた（Ｌ462）。どの石も、風化して細かく破損しているが、原型の境界はとどめている。各石の大きさは、概ね180㎝×140㎝であり、レベルから推察される石の厚さは10㎝前後であった。

この石敷きの西端、グリッドの西側ラインから60～80cmの地点では、南北に走る低く平らな石列（L464）が出土した。厚さと幅はほぼ一様で、それぞれ20cmと75～80cmであった。全面露出された石は一つだけ（長さ170cm）であるが、グリッド内4mを三つの平石が南北に横断していた。この石列の下に床の石はなく、むしろ石敷きの床に接するように敷かれていた。石列の大きさは、教会堂南側を東西に走る石列とほぼ同様である。またレベルも同じであり（878・23m前後）、南北に走る柱廊の基礎であったと考えられる。東西方向の石列はグリッドI6で破損・消失しているものの、南に隣接するグリッドI7でローカス462から南北に伸びる石列と元来直交していたものと思われる。

この石列の西側（L465）には石敷きは認められなかったので、おそらく異なる仕様になっていたと考えられる。[17] 石敷きの床の上からは、破壊されているものの、長さが1m以上ある切り石が、ローカス464の石列とほぼ平行した方向に置かれていた。一点では断定できないが、あるいは、平行した石列が存在したのかもしれない。この床のほぼ直上から検出された遺物には、ビザンツ期からマムルーク朝期の土器片の他、ローマ時代の鉄釘、ガラス片、石臼などがあった。

（4）考　察

遺構に関して言えば、ビザンツ期の石敷きがほぼ全面に残されており、同時期の教会堂の内側全体が石敷きの床で覆われていたことを推察させるものであった。石の大きさや敷き方は、H9、I7／10と同様であった。柱台を載せたと思われる石列は予想に反して南北方向に走っていた。以下の「Ⅲ．2．部屋4西側トレンチ」で記すように、アプスの前でも同じ方向の石列が確認されており、教会堂内側の四方を柱廊が囲んでいた可能性が高いと思われる。

床の直上からは、マムルーク朝期の土器片が一部復元できる形で出土しており、さまざまな時代の遺物が混在した土が入れられていたと思われる。教会堂内部に後の時代の大型遺構が認められないことから、ビザンツ期の教会堂が破壊された後は、残された周壁に囲まれた中庭で素朴な生活が行われていたということであろう。石臼やロバ用のハミの出土は、すでに指摘しているように、十字軍期やマムルーク朝期のブルジュ・ベイティン遺跡が農業共同体の中核として機能していたという解釈を支持するものだと思われる（杉本二〇一六b参照）。

Ⅲ．D地区

D地区は、「塔」の北側に設定された調査区である。本地区は二〇一五年度に設定され、ビザンツ期に建設された教会堂のアプスとみられる直径約8mの半円形の壁、それに接するモザイクの床、アプスの北に隣接する小部屋などが出土した（杉本二〇一六a参照）。しかし、調査期間の関係上、アプス北の小部屋やアプスと教会堂東壁との間の空間などは完掘できていなかった。

このため、これら二か所の空間の全容を解明することが今年度の主たる調査目的であった。特に北の小部屋はまだ床面まで到達しておらず、部屋の性格が明らかになっていなかったからである。また、ビザンツ期の教会堂の北東角と南東角は確認されておらず、塔との関係も不明であったので、教会堂東壁から南方向へトレンチを入れ、南東角の検出を目指した。さらに、アプスの身廊への張り出し部分（祭壇）の北側では、身廊から一段高い祭壇に上る階段などが検出され、それらの相互関係があきらかになることが期待された。この部分の調査は、別の調査班が行ったが、結果は、後述通り、予想外のものであった。

以下では、二〇一六年度のD地区発掘調査成果について、部屋4（祭壇北の空間）、その西側トレンチ、南側トレンチ、部屋5（北の小部屋）、アプスと東壁の間の空間、部屋6（北の小部屋の東隣の空間）、教会堂東外壁の順で報告する。

1．部屋4（祭壇北の空間）

（1）調査地区、基本層序

アプスから西に張り出した祭壇の北側部分では、ビザンツ教会の祭壇周辺の様相が把握できると期待された。しかし、マムルーク朝期に全面的に改変されており、家畜小屋（部屋4）として使用されたことがわかった（図9a）。この家畜小屋は、東側の大型建物に続く空間となっていたと思われる。このことは、マムルーク朝期の農業共同体がかなりの規模を持ったものだったことを示しているが、ビザンツ期や十字軍期の遺構は破壊されており、それらの時代の様相を復元することはむずかしいことも意味している。

（2）出土遺構

規模・形状

部屋の軸は、教会堂のものとほぼ同じであり、壁間は

図 9a　部屋 4（家畜小屋）の遺構（南側から撮影）

東西2・8m、南北3・0mで、約8・4㎡となる。ただし、南西隅には不揃いの石の集積が斜面を構成しており、出入りのためのスロープだった可能性がある。そうだとすると、実際の床面積はこれより小さくなる。このスロープと床の石敷きの前後関係は不明である。スロープ状の集積を被るように南西隅から北東に傾斜する崩壊した黄色いレンガの堆積（L778）が認められた。

床　面

床面は、長さ10～15㎝程度の高さのある礫を敷き詰めたもので、北から南に向かって若干の傾斜をもつ。その上には、しめりけのある黒褐色の土が敷かれていた。部分的に幾分大きめの平石を詰めた箇所があり、北西隅には約40×40㎝の方形の範囲に5㎝程度の小石を敷き詰めた箇所がみられた。北西隅には40×20㎝の不整形に凹んだ部分がみられた。

床上の設備

床の上では、南壁から北壁へ三分の一ほどの位置に、東壁から西へ1・7mの石列があり、部屋を南北に仕切っていた。東壁寄りには70×50㎝、高さ55㎝の大きな石、西端には50×34㎝の中央が凹む容器状の石が置かれていた。また、西壁際、北から三分の一ほどの場所からは67

×42㎝、高さ21㎝の方形で中央が凹む容器状の石が東に傾いて出土した。西側の辺の両端には突起があり、中央に半円形の盛り上がりがある。床面からはわずかに浮いており、底面には支えと考えられる石がみられた。凹みの中央には、直径約14㎝の貫通孔が認められた。

西　壁

西壁は、切り石を二段に積んで造られていた。石積みの上面は平坦であり、床面から80㎝高い。この平坦面の上には、長さ60㎝、幅20㎝、高さ40㎝の五個の切り石が約60㎝でほぼ等間隔に置かれていた。窓の仕切り壁と考えられる（L756～765、偶数が石、奇数が埋土）。壁面は、西側のトレンチ側では平坦な面を構成するのに対し、部屋側では表面が不揃いで、石の間に小形の石を積めるなど不安定で粗雑な仕上げとなる。このため南から3つ目と4つ目の仕切り壁の石は下面の支えを失い、部屋側に大きく傾いていた。

北　壁

北壁の東端部分（L751）は、整然とした切り石を五段に積んでおり、ビザンツ期の建設と考えられる。これから西は60㎝の間をあけ、粗雑な石を床から約80㎝の高さに二段積んでいる。この上に高さ60㎝の石を50㎝間隔で三個並べ、西壁と同様の窓状の区画を作っている。窓の上には、さらに平石を置いた上に四個の石を隙間なく置いている。東端の五段の切り石と北壁の間の幅60㎝の出入り口状の空間には、二段の大きな石が置かれている。二つの石の前面は北壁より突出していることから、北壁形成後に充填された可能性が考えられる。

東　壁

東壁は、大きな切り石を水平に三段積んだもので、形状からビザンツ期のものと考えられる。南側に以下で扱う部屋5への出入り口を伴う。出入り口は部屋5側へ登る階段で、一段目の床からの高さは約30㎝あり、中央部分は凹んでいた。一段目の上には、これより粗雑な石が置かれており、床からの高さは合計60㎝となる。

南　壁

南壁（L783）は、床面上で一段のみの石列を検出した。西端の石の上面は浅く平坦に凹んでいた。この壁及びそれより南側の地区の性格については、以下の南側のトレンチで扱う。

（3）考　察

部屋4では、床面直上までマムルーク朝期の土器が多数出土した。他に少量のビザンツ期、ごく少量の十字軍

期の土器も出土したが、同時マムルーク朝期の土器は床に近づくにつれ増加傾向にあり、この時期の廃絶と考えられる。

北壁（L751）と南壁（L783）は粗雑な小形の石を用いているのに対し、西壁は大形の切り石を積んでいる。西壁の二段目は上面が平坦にされており、これはビザンツ期にはみられない造りなので、北・西・南壁はマムルーク時代に作られた可能性が高い。おそらくこの一室はビザンツ期の構造物（東壁）を利用して、マムルーク時代に構築したものであろう。

この一室の目的は、本遺跡の他の部分より粗雑な壁を持つこと、高さのある敷石を伴う床の形状、窓の仕様、飼葉桶状の石製容器が置かれていることから、ロバ等の飼育の場所であったと思われる。西壁が比較的大型の切り石で作られており、その西面は粗雑な東面と異なり整然としていることから、東側と西側では空間の性格が異なっていた可能性が考えられる。すなわち西壁の東側が動物の空間であるのに対し、西側は人間の空間であったということである。また、北壁は遺跡内のマムルーク期の他の遺構と比べても簡単な造りであり、北壁の北側にも同時期の空間があったことが想定される。

2．部屋4西側トレンチ（図9b）

（1）出土遺構

昨年度のアプス前のトレンチをさらに北側に延長したところ、一部赤いレンガを含むプラスターの床面（L774）が現れた。それを掘り抜いてさらに下げると、アプス前と同様の幅75㎝ほどの平石の石敷面が出土した（L797）。この石敷はアプス前のものから一直線となる。これに対し、アプス上面の縁石は、南から北へ向かい平石と少しずつ距離が出るが、昨年の調査区の途中でわずかに屈曲し、以後ローカス797とほぼ平行となる。[18] 平石の西側は10～15㎝程度の小ぶりの平石を敷き詰めており（L793）、ローカス797の平石より一段低くなる。部屋4の石敷が高さを持つのに対し、この部分は扁平な石敷である。

昨年度調査したアプス手前の敷石の床についても、平石の西への広がりを確認する目的で、トレンチを50㎝程度拡張した。結果として、やはりアプス直前の平石（ローカス797）よりも幾分小ぶりの平石を確認した（L799）。上面のレベルは、アプス直前の平石よりも5㎝ほど低くなる。トレンチ中央付近の高位の二つの石の西端は10×80㎝の範囲で西への傾斜がつけられていた。また、低い平石の一つに一対の一辺23㎝の菱形の浅い彫り込みを確

認した（L905）。

本年度の拡張部分では、トレンチの北端（L775）とその2・7m南（L773）で東西の石列を確認した。いずれも高位の平石（L797）の上に構築されており、平石との接点にモルタルと思われるものを使用している箇所もある。二つの石列を壁の下部と考えると、ここに部屋あるいはそれに準じた空間があった可能性がある。

また、上述の通り、部屋4の西壁はこの場所の東壁にあたるが、部屋4側の表面が不揃いであるのに対し、この場所の東壁は整然とした仕上げになっており、この壁が西側を意識したものであったことがうかがわれる。

図 9b　部屋 4 の西側トレンチ（北側から撮影）

（2）考　察

本年度の拡張部分（北半）についてみると、プラスター（一部赤いレンガ）を含む床面以下（L774以下、L797上面まで）からもマムルーク朝期の比較的大きな破片が散見された。ローカス797（大きな平石）はマムルーク朝期以前の可能性があるが、最終的にマムルーク朝期に用いられた空間だと考えられる。

西側トレンチの南半部分を西側に拡張したところ、アプスの前には、西側の石敷きよりも一段高い石列が南北方向に走っていることがあきらかとなった。この石列は南壁と並行して走る石列やH7の石列とほぼ同じ仕様であり、ビザンツ期の列柱の基礎である可能性が高い。後述するように、アプスの先端（西側）部分はおそらく後からの拡張なので、元来の東側周壁からこの列柱の基礎までは、他の箇所とほぼ同じ幅の空間を確保できると思われる。もしこの解釈が正しいとすると、ビザンツ期の教会堂全体の周壁の内側四方を列柱廊が囲んでいたこととなる。ただし、この点は全体構造の解釈と関わる問題であり、中央遺構の性格もまだ不明確なので、慎重な検討が必要となるであろう。

一方、アプス立面の石の構成に注目すると、トレンチ中央部の一つ（割れているが一つのもの）がアプス上面まで一つの大きな石であるのに対し、これ以外は二段積みとなっていた。さらに、中央の大きな石から南では比較的大きな石の上に厚い平石を置き、隙間に小さな石を多数充填することが特徴である。これに対し、中央の大きな石より北では、高さ35㎝ほどの大きな石を二段に積むことが特徴である。石の隙間には小石とモルタルと思われるものを多用していた。おそらく中央の石はビザンツ期の石材であるが、それ以外は後代の積み直しであろう（以下の南側トレンチの報告も参照されたい）。

3．部屋4南側トレンチ

（1）調査地区、基本層序

西側トレンチのプラスターを含む床面（L774の上面）は、昨年度までの調査で確認されたアプス前面に広がるプラスター面の高さに近似していた。そこからマムルーク朝期の大きな土器の破片が出土することから、アプス側のプラスター面以下も同時期とである可能性を考え、部屋4の南側にトレンチを設けた。

（2）出土遺構

調査の結果、プラスター面以下から、やはりマムルー

ク朝期の土器片が出土した。また底面からは、部屋4と同様の凹凸のある石敷が確認され、この時期に同様の空間として用いられていたことが想定される。トレンチ内からは東西（L794）および南北（L900）の石列が発見されたが、それぞれの役割は判然としない。このうちローカス794については、上面の石が蓋状であったので排水溝を想定し石のひとつを外してみたが、溝状の加工は確認できなかった。

（3）考　察

西側トレンチと同様、プラスター面の下からマムルーク朝期の土器片が出土すること、床面が家畜小屋（部屋4）と近似すること、部屋4との間の壁（L782）が簡素なものであることから、部屋4に関連したマムルーク朝期の施設があった可能性がある。

そうだとすると、南側の祭壇部分との境には粗雑な一段一列の石列（部屋4の南壁）が存在したが、これはそれ以降の構造ということになる。その上に見られた二つの石列も同様である。実際、祭壇正面を支える石列も真っすぐ並んでいるわけではなく、石材にもばらつきが認められたことから、このアプスから張り出した祭壇部分はビザンツ期のものではなく、マムルーク朝期以後に積み直したものである可能性が高い。実際、二〇一三年度の調査では、アプスの半円形の入り口部分をふさぐように真っすぐな壁が南北方向にあったことが知られており、その内側には後期イスラーム期の墓と思われる遺構も残っていた。おそらくマムルーク朝期以降、アプスの前面部分は別の目的に使われていたと思われる。その改変の広がりと時期を特定することはできなかったが、家畜小屋南側の壁や石列、プラスター床、後述する階段の上に設置された粗雑な壁などは、マムルーク朝期以降にも限定的な活動があったことを示しているであろう。

4．部屋5（図10、グリッドF／G12／13）

（1）調査地区、基本層序

本地区は、部屋の出入口用に加工された石材が発掘調査開始以前から地表面に露出していたため、何らかの部屋の存在が想定され、二〇一五年度に調査が開始されたものである。その後、この空間の南隣からアプスが出土したことで、ここに位置する部屋は聖餐準備室あるいはクリプトとして利用されていた可能性が想定された。しかし、大きな落石を多数含む土層（L702）が1m以上も続いたため、二〇一五年度は調査を中止した。その時点

図10　部屋5の遺構（西側から撮影）

ですでに隣接するアプスから出土したモザイク床よりも80㎝ほど、入口の敷居よりも20㎝ほど低い位置まで掘り下げていたが、床面は検出できていなかった。一方、部屋の出入り口は後代に石で塞がれており、南壁にもいくつかの貧弱な壁が加えられた形跡が認められた。二〇一六年度は、この北の小部屋の床面を確認し、その性格を把握することを目指して調査を行った。

（2）出土遺構

埋土の土質は相変わらず、落石を含むしまりの悪い土であったが、調査シーズンの更新に伴い、新たなローカスを設定した（L739）。この小部屋は本来ビザンツ期に建設されたものだと想定されたが、ローカス739に含まれる土器はビザンツ期のもののほかに、十字軍期のものやマムルーク朝期のものも多く見られた。廃絶年代は、マムルーク朝期であろう。

床は結局検出できないまま、標高878・37mの地点で岩盤直上のテラ・ロサが確認されたため、ローカスを変更した。テラ・ロサは岩盤の石灰岩が風化して堆積したものであり、自然に形成されたものと考えられるが、この堆積土（L750）中からも、玄武岩製の擦り石片を含む多数の遺物が確認された。このことから、本空間は後代に

かなり大規模に破壊された可能性が考えられる。

ローカス750下の岩盤（L768）は、部屋の入り口付近を頂点として東に向かって傾斜しており、比高は約50㎝に達する。このことから、岩盤そのものが床として使用されていたと考えることは難しい。また、部屋の東壁（W703）と北壁（W731）をみると、岩盤直上一段目の石材は、二段目以上の石材に比べて粗く整形されている。このことは、少なくとも岩盤直上一段目の石材は、地下構造（基礎）の一部であったことを示している。同様の構造は、後述する教会堂東外壁のほか、二〇一三年度に調査した教会堂南西角においても確認されている。ビザンツ期の床は、結局基礎の上、精巧な切り石の段の下（標高878・13m前後）にあったと考えるべきであろう。

（3）考　察

基礎の上の東壁を見ると、内側と外側の二つの精巧な切り石で構成されており、これは典型的なビザンツ期の工法である。しかし、二段目はあたかも部屋の面積を広げるように、内側の石が外されていた。北側の壁も、その外周は確認できなかったが、同様の仕様に見える。一方、西壁と南壁は、岩盤の上に土層をはさんで粗く整形された石が不揃いに積まれており、すべてが後代（おそらくマムルーク朝期）の積み直しだと考えられる。元来のビザンツ期の部屋は、それぞれの方向にもう少し奥まで広がっていたであろう。マムルーク朝期の床は、西壁に設けられた入口に詰められた階段状の石や南壁の形状から見て、二段目の上面の高さにあったと思われる。

5．アプスと東壁の間の空間（グリッドG13）

（1）調査地区、基本層序

本空間も二〇一五年度に調査された場所であり、階段状に積まれたように見える石材が三段出土した状態で発掘が中断していた。この石材の一つはゆるやかな凹状のカーブに削られており、アプスの壁に用いられていたものであることから、この施設がビザンツ期以降に造られたものであることは確実である。

（2）出土遺構

階段状の遺構（L740）の北側の空間（L741）を調査した結果、さらに2段分の石材が検出され、都合五段分が確認された（図11a、11b）。各段の比高は約20㎝と一定であることから、これが階段として用いられていた可能性は十分に考えられるであろう。アプスの曲面に従って曲がっており、三段目の西側には戸の軸受けのような石が

図 11a　階段状遺構（グリッド G 13）（北側から撮影）

図 11b　家畜小屋と部屋 5、階段状遺構の関係

認められた。本遺構の下にある構造物も上にある構造物も明らかではないが、ローカス741からはマムルーク朝期の土器が多く検出されたことから、これらの空間がマムルーク朝期に使用された可能性は高い。階段の上には竈（タブン）の破片も見られたが、機能が異なるため、これはそれよりさらに後の時代の活動の痕跡であろう。

また、階段の北端部分からはアプスの北端と教会堂東壁を直角に結ぶ東西方向の壁（W767）が検出された。下端まで掘り下げていないものの、長辺が90㎝程度にもなる大きな切り石を隙間なく積む手法から、教会堂と同時期の壁と考えて間違いないであろう。この壁は北面が平坦に整形されていることから、同面が外側へ向いていたことになる。先述の通り、部屋5の南端付近には、後代に加えられた石列がいくつか見受けられ、小部屋そのものの南壁は破壊されてしまったものと想定していたが、W767が小部屋の南壁であると考えることも可能である。

一方、そのさらに北側にある小型の石で造られた粗雑な一段の壁（W737）は、部屋5の入り口から階段へのアクセスをふさいでいる。部屋5の入口から西壁の構造は、入口から九十度曲がって階段に向かう踊り場になっていたように見えるので、おそらくこれは祭壇前面などで見られた改変と同様、マムルーク朝期以降に設置されたものであろう。

さらに、階段の南側では、通路のように平坦になった空間（L744）が検出された。しかし、これと階段との関係は不明確である。

6．部屋6（北の小部屋の東隣の空間、図12、グリッドF／G13／14）

（1）調査地区、基本層序

本地区でも、発掘調査開始以前から石列が確認されており、何らかの人為的な空間の存在が予想された。二〇一五年度の調査の結果、ここには四方を壁に囲まれた一辺2・5m程度の空間であることが分かった。しかし、部屋5同様、落石を含む土（L701）が深く堆積しており、二〇一五年度はアプスの検出に注力したために調査を中断した。今年度改めて調査を行うにあたり、新たなローカス（L781）を付し、発掘を再開した。

（2）出土遺構

調査の結果、部屋5のローカス739と同様、床面のようなものは一切検出できずに70㎝ほど掘り下げた後に岩盤（L904）に到達した。ただし、マムルーク朝期の土器片

図 12　部屋 6 の遺構（北側から撮影）

はほとんど検出されず、大部分がビザンツ期のものであった点はローカス739と異なる。ローカス781からは、このほかに牛と思われる大型哺乳動物の骨なども出土している[19]。一方、ローカス781は、西側以外の三方をおそらくマムルーク朝期の壁が囲んでいるにも関わらず、同時期の土器片がほとんど出土しない点は注目に値する。この空間がブルジュ・ベイティン遺跡の歴史を通じてどのような性格を持っていたのかは、今後検討する必要がある。

（3）考　察

西壁は切り石製のビザンツ期の教会堂東壁（W703）であるが、残り三方は比較的粗雑なつくりであり、後代に加えられたものと考えられる。つまり、この部屋は、ビザンツ期の教会の外壁に寄りかかるように造られていたこととなる。この点は、教会堂以東に広がるマムルーク朝期の施設群（C地区）との関連を想定する上で、重要である。特にこの部屋の東側では、石列がさらに東側の大型建物に向かって伸びていることが地表から観察でき、この部屋を始め、部屋5や家畜小屋（部屋4）、階段施設なども、マムルーク朝期の大型建物の一部であった可能性も考えられる[20]。

また、ビザンツ期の壁W703の東面では、岩盤直上の構

造を確認することができた。他の地区同様、岩盤直上の一段目は、粗く整形された切り石を使用していた。また、岩盤の標高がより低くなっている南部には、もう一段切り石の列を置き、平坦な面を作ったうえで壁を形成するという手法も確認された。

7．南東角付近（グリッドH／J13）

（1）調査地区、基本層序

教会堂の南東角を検出し、塔と教会堂の関係をあきらかにするために、平面図から予測される塔の東壁から約1・2mの地点に、幅1mのトレンチを南北方向に設けた。結果として、この区画は後代に大規模に破壊されていたことが判明し、トレンチの北側部分と南側部分でわずかに遺構が確認されただけであった。

（2）出土遺構

北側部分では、地表下5cm程度の地点から、非常に粗雑に組まれた石列（W770）が検出された。本トレンチは幅1m足らずの調査区であり、この壁の性格を解明するには十分ではないが、壁の南面には漆喰の面（L771）が確認された。漆喰面は南へ行くにしたがって水平になり、切り石による石列（L772）の上面まで続いていることが、本トレンチの西面土層断面の観察によって明らかになった。このように漆喰の塗られた小部屋は、すでにC地区のマムルーク朝期の大型建物に複数検出されており、同一の建物の一部である可能性も考えられる。[21]

残念なことに、本トレンチは南方ほど後代の破壊が激しく、W772以南ではほとんど遺構は検出されていない。南端付近では、現在の地表下約80cmの地点からも現代の廃棄物が出土しており、考古学的に意味のある層位ではなかった。南端付近からは直角に並べられたように見える石列（W776）が検出されたので、その周囲のみをさらに掘り下げた（L777）。その結果、W776を構成する石列は一辺が100cmほどもある大きなものであることがわかった。丹念に整形されており、おそらく本来はビザンツ期の建築に用いられたものであると考えられるが、検出されたのは崩落した状態であり、教会堂の南東角を明らかにするには至らなかった。[22] この地点よりもさらに掘り下げれば、ビザンツ期の原位置の壁が残っている可能性も考えられたが、塔が支持を失い、崩落する危険性を懸念し、この時点で調査を終了した。

Ⅳ．C地区

発掘調査と並行して行った清掃作業中に、C地区の東側で南北方向に長さ10m以上にわたって延びる壁が観察された。この壁は、すでに発掘されているC1地区の家畜小屋（マムルーク朝期）の入り口から始まり、C2地区の貯蔵庫群の東側に繋がっているように見える。上段の石は後代に積み直されたもののようであるが、少なくとも最下段の石は遺構を形成しているものと思われる。おそらくマムルーク朝期の建物の外壁であろう。これだけの証拠で断定的なことは言えないが、もしこの壁がマムルーク朝期の大型建物全体の外壁であるとするなら、この建物は、南北25m程度、東西17m程度の巨大なものとなり、西側はビザンツ期の教会の壁に寄せて造られていたことになる。尚、この石列の一部にはタブラ・アンサタが刻まれたものがあり、ビザンツ期の教会堂の建材の再利用だと思われる。

Ⅴ．まとめ

以上、二〇一六年度のブルジュ・ベイティン遺跡における調査では、ビザンツ期の教会堂の中央に記念聖堂らしい特殊な遺構が検出されたことが注目に値する。この遺構は、入口とアプスを結ぶ軸線上に設けられていた。今後は、この遺構と教会堂全体の構造との関係を検討し、ビザンツ期における教会堂の建築様式の発達史を研究することが必要となるであろう。また、このような施設の存在は、この場所が聖書の伝承と関係があった可能性を高めるものであり、アブラハムの「ベテルの東」と同定すべきかどうかも含めて、ブルジュ・ベイティン遺跡の性格を理解する上で重要となるであろう。さらに、この施設は、十字軍期やマムルーク朝期にも改変されつつ継続使用されていたようであり、宗教的伝統の継続と変化をとらえる上でも重要であろう。

また、本年度は、D地区においてマムルーク朝期の家畜小屋が見つかり、同時期の階段や小部屋群などと関連していたことがわかった。ブルジュ・ベイティン遺跡におけるマムルーク朝期の活動は、これまで知られていた以上に活発であったと思われる。これまで調査されてきたマムルーク朝期の遺跡は都市遺跡が多く、当時の農業集落の実態がわかる例は少ないので、本遺跡のデータは、今後マムルーク朝期のパレスチナ社会の全体像を検討する上で貴重な資料となるであろう。

参考文献

Loosely, E. 2012 *Architecture and Liturgy of Bema in Fourth-to Sixth-Century Syrian Churches*, Leiden : Brill.

MacDonald, B. 2010 *Pilgrimage in Early Christian Jordan : A Literary and Archaeological Guide*, Oxford and Oakville : Oxbow Books.

杉本智俊　二〇一四年「ベイティン（ベテル）遺跡における考古学的調査の課題」『聖書学論集』四六号、六一―八二頁。

杉本智俊　二〇一六年a「二〇一五年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』八六巻三号：七三―八五頁。

杉本智俊　二〇一六年b「パレスチナ自治区ブルジュ・ベイティン遺跡の塔の機能と年代―ビザンツ期、十字軍期の塔との比較を通して」『古代オリエント研究の地平――小川英雄先生傘寿記念論文集』リトン、二〇七―二二九頁。

杉本智俊・間舎裕生　二〇一三年「二〇一二年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的一般調査」『史学』第八二巻第一・二号、一〇五―一二七頁。

杉本智俊・菊池実　二〇一四年「二〇一三年度　ワディ・ワタヒーン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八三巻第二・三号、一一九―一三八頁。

杉本智俊・菊池実、間舎裕生　二〇一五年「二〇一四年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八四巻一―四号、五二三―五三六頁。

杉本智俊・西山伸一・間舎裕生　二〇一三年「二〇一三年度ブルジュ・ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』第八三巻第一号：五七―八七頁。

註

（1）ベイティン遺跡の詳細については、杉本・間舎二〇一三参照。また、ブルジュ・ベイティンで発掘された教会堂については、杉本二〇一六aを参照されたい。

（2）石列は堅い石灰岩製（長さ80～120㎝、幅74㎝、厚さ20㎝）であり、現在東西に約27ｍ視認可能である。付近には二次使用の状態で三基の柱台と倒れた柱身一本も残されており、石列は柱廊を支える基礎だったと思われる。

（3）外壁の外側部分から石列の南側の縁までは4・6ｍであるが、教会堂全体の南北の幅は約28ｍある。

（4）北西角の囲みは、今回完全に露出されていないが、他の三基とほぼ同じ構造であったと考えられる。

（5）ただし、十字軍時代のテッセラなども認められたので、詳細は今後検討する必要がある。

（6）事実、本教会堂内部から、多数のスクリーンとポストの断片が出土している。

（7）この遺構と囲みで構成された遺構は、全面が漆喰で塗られており、あきらかに特別な空間を形成していた。住居や倉庫、厩舎として利用された大型建物とは、建築の性格そのものが大きく異なっていたと思われる。

（8）階段の上の石敷きの床面はマムルーク朝期のものであるが、これも改変されている可能性がある。

(9) シリアのカラート・セマーンの聖シメオン教会は、その例とみなせるかもしれないが、これは長堂式の会堂自体が十字型に広がっており、完全に同じとは言えない。ヨルダン王国ウム・カイス遺跡の教会テラス内に存在する正方形の教会は、内側に八角形の集中型の教会堂を持っており、比較できるかもしれない（MacDonald, fig. 3; 5参照）。

(10) 創世記一二章八節、同二八章一〇―一九節、列王記上一三章には、それぞれアブラハムの祭壇、ヤコブの幻、金の子牛の高き所を非難した預言者の墓とベテルを結びつける記事が記されている。詳しくは、杉本二〇一六bを参照。

(11) ビザンツ期の教会堂は、その時代の末期に破壊されたものと思われる。初期イスラーム期（ウマイヤ朝、アッバース朝）の生活の痕跡が、まったく認められないからである。

(12) 囲み内側の漆喰が分厚いことも考えると、この囲みの石を積み直したのはかなり早い時期（十字軍期？）だと思われる。少なくとも、通路の間を詰めた時代よりは前でなければならない。

(13) 囲み構造の外側に元来もう一重の壁があったとしても、マムルーク朝期には使用されていなかったこととなる。

(14) そうだとすると、マムルーク朝期以降になぜ忘れられたのかは課題である。

(15) 外壁の漆喰が薄いことにも留意されたい。

(16) アブラハム伝承が残る場所でのビザンツ期、十字軍期、イスラーム期の交錯は、アル・アクサ・モスク（エルサレム）、ヘブロンでも見られる現象である。ヤコブはイスラエル民族の直接の祖となるが、イスラームでも崇敬されていた（クルアーン二一章「預言者」七三節など参照）。

(17) この床面に漆喰などの付着は皆無であり、モザイク面であったかどうかは不明である。ただし、二〇一三年度の調査時に、教会堂内部の南西隅近くからひどく破壊されたモザイク面が検出されていたことと合わせて考えるべきであろう。

(18) 西側トレンチの実測図は、高位の平石の南北端における中点を結んだ線、アプス中央部の一段積みの大石の上面の北端を基準として作成した。

(19) このように動物骨とともにビザンツ期の土器片が大量に出土するのは、二〇一三年度に教会堂南西角付近を岩盤まで掘り下げた際にも見られた現象である。

(20) 部屋6と部屋5の構造状の類似性、部屋4（家畜小屋）から部屋5を通って階段施設に至る経路を考える時、これらは一つながりの施設であった可能性が高い。

(21) 出土標高からも、同時期に属する遺構の一部であると思われる。

(22) この地点は、塔に近接しており、その建設の際に破壊された可能性も考えられる。